

いよいよコメが 神棚から引きずり降ろされる

本誌は今月号で創刊300号を迎えた。1993年5月の季刊発行の時代から隔月刊、月刊の時代を経て、創刊以来28年目になる。その間、わが農業界も大きく変わってきた。

ここまで書いたところで旧知のNさんから電話がかかってきた。子供の受験に付き添ってきたので事務所を訪ねてよいかとのことだった。スガノ農機でプラウと畑作技術系の伝道師をしてきた彼が農家になって4年。彼が営業マン時代のお客さんたちやSNSを通じて広がっていく友達の輪が彼を育てた。13ha規模の畑作農家に成長しようだ。

創刊した93年は冷害に見舞われたが、それは天災ではなく、土壌管理を怠った人災だという少し過激な実演勉強会をスガノ農機とともにその翌年に開いた。2

月の茨城に代掻きもできる実演圃場を作って耕うん・整地・代掻きなどを実演し、夜遅くまで勉強会を行なった。その時、集まった今ではもう70歳前後になっているだろう参加者たちが、同じ考えを持つ農家が全国におり、そんな仲間に出会えること

に嬉し泣きをする人もいた。ウルグアイラウンドの農業合意をしたばかりの頃で、会場で語られる技術問題ばかりではなく、時代や農業政策、農村社会に対する彼らの考え方はきつと村ではタブーとされる意見だったのだろう。

そんな創刊時から本誌は、水田への畑作技術系導入の意義や科学的土壌管理の重要性を伝えるとともに、農業経営者としての生き方や様々な経営手法の提案をしてきた。水田での子実トウモロコシ生産を提案したのも、単に作物としての子実トウモロコシではなく、水田への畑作技術導入を前提としたものだ。

しかし、これまで様々な呼びかけをしてきたが、農業界全体から見ればほんの少数に過ぎない読者たちの共感を得られても時代が変わったとは思えなかった。そんな中で、唯一時代を変えるのは世代交代なのだと感じてきた。変化を感じてきたのは20年くらい前からだった。当時の若い世代の読者たちにそれまで出会ってきた農家とは全く違ったセンスを感じたのだ。変化を妨害しているのは、僕と同世代の団塊の世代だった。

そして、いま彼らが引退していく。さらに、この間のSNSの普及とそれを通じた地域を越えた優れた農家同士のネットワークで共有される技術、想い、そして共感が時代を変えている。かつて海外の視察ツアーで出会った欧米の優れた農業経営者の仕事や考え方は本誌などのメディアが伝えていたが、すでにその役割は限定されてきている。農業経営者自身がネットを通じて海外のメーカーや農家が伝える情報をSNSの仲間に広めていく。

かつて、農業機械の製品情報もメーカーは「標準小売価格」を公開していたにもかかわらず、農業メディアはそれを伝えなかった。本誌が創刊当初に読者を獲得していった理由は、商品に関する記事に付けられた番号をはがきで本誌に返送すれば、メーカーから読者にカタログが届くという「カタログ請求システム」によってだった。今なら個人情報保護違反として批判されるどころだが、それが読者に支持されるほど、農家は社会から隔離されて「ムラ」に隔離されてきたのだ。

今月号の特集は土門剛氏の責任編集によるコメ特集である。あなたの心から神棚はもう無いと言えるか。そろそろ皆で渡れば怖くないという理屈は通らなくなった。

江刺の稲

「江刺の稲」とは、用排水路に手刺しされ、そのまま育った稲。まったく管理されていないこの稲が、手をかけて育てた畦の内側の稲より立派な成長を見せている。「江刺の稲」の存在は、我々に何を教えるのか。土と自然の不思議から農業と経営の可能性を考えたい。